

地域・建築士交流セッションA・B まちなかの魅力再生

- 会 場：佐賀市まちなか交流広場(愛称：656(むつごろう)広場)
- 日 時：平成22年10月22日 10:00~13:00
- 参加者：約420人(セッションA・Bの延べ参加者数約750人)

地域・建築士交流セッションA・Bは、大会会場を飛び出し、市街地の中の「佐賀市まちなか交流広場」で開催しました。中心街の空洞化が全国共通の悩みとなるなか、佐賀市の中心市街地を題材に、地方都市における「まちなかの魅力再生」について建築士はどういう視点を持って関わっていくのか考えようとしたものです。また、市民と建築士との絆づくりの取り組みとして、セッションの運営から地元商店街やNPO、大学生などにも参加いただきました。大会会場からはチャトルタクシーを使つての参加にもかかわらず、予定の参加者数を大きく上回る参加がありました。

セッションA—まち歩き

セッションAでは、「まちなかMAP」を手に佐賀のまちなかを歩いていただき、水網などの地域資源、空き地、空き店舗の状況を実際に「見て」「感じて」いただきました。「まち歩きガイドスポット」では、地元の方々が参加者へ説明を行いました。また、恵比須DEまちづくりネットワークの市民団体の皆さんによるまちのあちこちに点在するえびずさんを訪ねる「恵比寿巡りツアー」も実施しました。

参加者には事前にポストイットをお渡しし、まち歩きの感想やコメントなどを提出していただき、セッションB—パネルディスカッションにも反映させることとしました。主な意見としては「水が近い、美しい、水路をもっと生かして」「佐賀のまちは平な印象、高層マンションは似合わない」「アーケードが無くなった後のまちづくりの方向性を出して」「恵比寿をまちづくりに生かしてほしい」などのたくさんの意見が寄せられ、建築士連合会まちづくり委員の村上さんが報告しました。

セッションB—パネルディスカッション

セッションBでは、全国の建築士の方々だけでなく地元佐賀市の商店街の方々や中心市街地活性化に取り組むNPO関係者、佐賀まちなか居住研究会、大学生など幅広く市民にも参加いただき、「まちなかの魅力再生」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

コメンテーターとして佐賀市出身の建築家・ワークビジョンズ代表の西村浩さん、パネラーとして佐賀のまちなか居住研究会代表・佐賀大学准教授の三島伸雄さん、熊本市の上乃裏通りの商店街再生をけん引されたサンワ工務店代表の山野潤一さん、コーディネーターを連合会まちづくり委員の豊永信博さんが務めました。

山野さんから、「熊本市上乃裏通り」の取り組みについて、それぞれのお店が頑張って一軒一軒がエネルギーを出している、古い建物に新しいものを融合して店舗づくりのお手伝いをしている、キーパーソンとしての若者をいかに巻き込むことがまちの魅力再生に大切



市民団体「恵比須DEまちづくりネットワーク」による説明風景



「まちなかの魅力再生」をテーマにしたパネルディスカッション

であることが報告されました。また、お店をやりたい若い人は多いが、お金の借り方がわからなかったり、貸してもらえないことが多い、新規開業のための窓口を上げ、敷居を低くすることを自治体や商工会議所がもっとやるべきと提案されました。

西村さんは、昭和40年代のにぎわいを振り返りながら、中心市街地の人口減少、商店街の通行量の激減、空き地・空き店舗増加の現状と現在佐賀市中心市街地で取り組んでいる「4核構想プロジェクト」について紹介されました。このなかでこの街に住みたい、歩きたいというニーズをつくり、人の流れをつくるプログラムが必要だと訴えられました。具体的な短期的取り組みとして、空き地をマネジメントするための「コンテナ社会実験」や水路を生かす仕組みとして「CLICK! DE CREEK!」などの提案についても紹介されました。人口減少や買い物客流出による空き地・空き店舗の増加が続くなかで、昔のように街をにぎやかにというのは現実的に難しいのではないかと、「元気なエリア」と「空き地に突す場所」とを戦略的に分けて、市民・商店街とが一緒になって空き地を計画的にマネジメントすることが必要と提言されました。

三島さんは、昨年から佐賀県建築士会と一緒に活動している「佐賀のまちなか居住研究会」の取り組みについて紹介され、佐賀の日照率の高さを生かして、身近な水路と歴史を楽しむ中低層の居住モデルを中心市街地の3地区において提案を行ったことが報告されました。今年は佐賀大学のゼミの学生と「空き家に住もう実験」に取り組んでおり、学生がまちなかの空き家実際に住んで、学生と市民がたまる場所をつくることによって、街の雰囲気至少在り、中心市街地に住もうという動きにつながればと語られました。

市民参加者から、空き店舗が増え、さらに客足が遠のくという悪循環が続いていると意見が出されました。これに対して、山野さんから「佐賀は古くていい物件があるが、宝が眠ったまま、まちの財産を回遊できる仕掛けが必要」と訴えられました。また、西村さんからは、「現実的に店が減っている以上、一生涯懸命でも、どこかに空き店舗はできる。まちを元気にするには、今は埋めることより、どこに集まるかを考える時期に来ているのではないかと提言されました。

(セッションA・B担当 阿比留博之)